

神戸国際大学
キリスト教センター通信
第129号
2025年5月7日

「害虫と宗教」

神戸国際大学キリスト教センター長
浅野 貴彦



“彼〔家の主人〕は言った、「いや、毒麦を集めようとして、麦も一緒に抜くかも知れない。収穫まで、両方とも育つままにしておけ。収穫の時になったら、刈る者に、まず毒麦を集めて束にして焼き、麦の方は集めて倉に入れてくれ、と言いつけよう。」（マタイによる福音書13章24-30節、口語訳）

六甲アイランドでもバラが美しく咲き誇るシーズンになってまいりました。我が家の小さな庭にはノックアウトのバラが植えてあり、今年も無事に咲いてくれそうです。ノックアウトバラの名前は、黒点病などの病気を「ノックアウト」するほど強健なことに由来します。実際、根の周りには周囲と較べて雑草が生えにくい様子で、なにか毒のようなものを放出しているのかと推察していますが、実際のところはよく分かりません。

近年、気候変動による熱波や水不足で食糧不足に直面している地域が世界中で報告されていて、暑さ、干ばつそして害虫に強い食用植物が遺伝子組み換え技術によって開発され、生産されています。しかし害虫を追い払い、農薬の使用を不要にさせるその「毒」が、それを食す人間にとっても毒になりうるケースがあり、ジレンマに陥ることもあるようです。

冒頭で引用した毒麦の毒は、毒麦自身が作り出しているものではなく、細菌感染から生まれる神経毒だそうです。いずれにしても人間の食用植物にはなりませんが、その「毒草」がまったく無用かというそうではなく、その毒で周囲の麦を虫から守っており、冒頭の引用箇所は、「無用の用」をわきまえた古人の知恵を感じさせる言葉です。

また、害虫という概念が生まれたのは近代になってからで、江戸時代までは虫害は神罰やたたりと考えられていました。何を害虫とみなし、それらにどう対処するかは時代や地域のライフスタイルや技術の発達に左右されます。たとえば江戸時代、虫は自然発生するものだと考えられ、それを防ぐ方法は田圃にお札を立てるという神頼みだけだったそうです。神頼みしか対処法がなかった時代には、排除対象としての「害虫」は存在しなかったとされています。

このように人間はついつい「無用」なものに「害」や「毒」の名前をつけて、排除対象にしてしましますが、意外とその存在そのものには「無用の用」があるのかもしれません。実際、別の見方をすると、生命の源となる飲料水も飲みすぎると、お腹をこわし、「毒」になってしまいます。学生生活で「そんな無駄だ」と思っていることも、時間がたつと、案外いいものにも変わるのかもしれません。

ひとくちメモ

コンクラベ（教皇選挙）が始まります。枢機卿252人のうち80歳未満の135名に投票権がありますが、今回、史上初めてヨーロッパの出身者が選挙人全体の半数を下回り、アジアや中南米、アフリカの出身者が増えています。今後、アジア出身の教皇誕生もありうるのではないのでしょうか。

